

古代ローマに学ぶ食糧問題

(株)資源・食糧問題研究所代表 柴田明夫

■はじめに

古代ローマは、紀元前2世紀ごろから初代皇帝アウグストゥスの治世にかけて、共和政から帝政へと大きくその統治体制をかえる。背景には食糧問題があった。戦争による版図拡大とともに、都市ローマにはアフリカ(チュニジア)、エジプト、ギリシアなど、多くの属州から大量の穀物が流入するようになる。この一方、イタリア半島では小麦生産からオリーブなどの果樹に切りかわり、小麦などの基礎食糧である穀物は、属州から輸入する形となった。その結果、都市ローマは、しばしば食糧危機に見舞われるようになる。治世者にとって、食糧供給の確保はきわめて重要な課題であり難題でもある。食糧問題を解決するために強大な権限を与えられたのが、初代皇帝アウグストゥスだ。

多くの食糧を海外に依存する日本にとって、その危うさを古代ローマに学ぶところが大である。

■ローマ軍の強さは自作農民の強さ

古代ローマは、伝説の王ロムルスにより紀元前753年に建国されたといわれている。当時のローマ人は何を食べていたのだろうか。パトリック・ファース『古代ローマの食卓』によると、質素儉約とは無縁でかなりの美食であったらしい。豚の耳や魚の目、動物の内臓など、さまざまな肉類を大いに楽しんで食べたという。パンは無料であった。

前509年に王政が廃止され、元老院と民衆による共和政が始まった。これを契機に、ローマは遅れた小国から国際都市へと変貌する。軍事力と農業経営力を兼ねそなえたローマ人は、周辺の地方を征服して領土にし、農地にかえていった。農民にとって軍は出世し、地主となるための格好の機会となった。やがてイタリア全土がローマの農地にかえられていった。ローマ人の関心は土地にあったのである。被征服民は土地を灌漑する方法

を学んだ。

裕福な上流階級が、大多数の奴隷や自由市民や外国人とともに生活していた。その全員に食べさせるため、船に積んだ穀物をシチリアやエジプトといった植民地から輸入した。富める者は、ベルギーからハムを、ブルターニュから牡蠣(カキ)を、アフリカ(チュニジア)から野生動物を輸入し、友人や奴隷、貧しい市民に与えた。ローマは巨大な胃袋となり、あらゆるものをむさぼり食った。



『最新世界史図説タベストリー 十三訂版』p.77 「@食材のふるさと」

しかし、ローマの繁栄は永遠に続いたわけではない。共和政末期から初代皇帝アウグストゥスの治世となり、ローマ帝国が最大の版図になるのは後117年のトラヤヌス帝の治世下だ。もはや帝国は新しい領土を獲得することがほとんどなく、それゆえ新しい奴隷を獲得することもなかった。新しい農場が設営されることもなく、交易が不活発になり増加する人口を養うことが難しくなった。

3世紀にはいるとローマ帝国は、政治危機、軍事危機、財政危機といった混迷の時代にはいる。ディオクレティアヌス帝の治下(284~305年)には、インフレによって物価が高騰し、食糧をはじめ、あらゆる商品が消えた。土地を離れる農民の数が増えていったため、皇帝は、農地を放棄することを禁止した。

実は、古代ローマ軍の強さは農民の強さにあった。青柳正規『ローマ帝国』によると、兵士として戦争にかり出されたのは、小規模の土地を所有する自作農民だった。彼らは自ら戦争のための武器を調達したばかりか、出征期間中は耕作すべき土地を一時的にせよ放置しなければならなかった。しかし、版図拡大に伴い、遠隔地での戦争が多くなり出兵期間も長くなると、農民兵士は農地を手放さざるをえなくなり、やがて没落する。農民による正規軍を編成できなくなったローマ帝国は傭兵への依存を高める。しかし、これがやがて国内の政治的混乱につながっていった。実際、西ローマ帝国が476年に滅んだのは、ゲルマン人の傭兵隊長オドアケルが、幼帝ロムルスを廃位したことによる（それにしても、ローマは伝説の王ロムルスにより建国され、同じロムルスの廃位により滅亡したのは、なんとも皮肉である）。

■食糧供給は国家の最重要課題

あらためて古代ローマの食糧問題についてまとめてみたい。古今東西でローマ帝国に関する書籍は汗牛充棟であるが、それらのなかで食糧供給については、その重要性にもかかわらず断片的にしか触れられていないようだ。それだけ残された資料が少ないということでもあろう。この点、宮崎麻子『ローマ帝国の食糧供給と政治』は、原文での膨大な資料にあたり、この難問にまっこうから取り組んだ労作である。そこで、以下では本書をベースに、この興味深いテーマについて解説してみたい。

一国にとって、食糧安全保障とは、国民に良質の食糧を安価で安定的に提供することであり、政府の最重要な役割である。古代ローマにおいても、穀物をいかに入手するかという課題は、国民にとってきわめて重要であり、また困難なものであった。このため、穀物供給問題については共和政の初期段階から帝政にいたるまで、時代とともに多様な対応がなされてきた。

共和政前期のころまでは、食糧供給については基本的には統治側が関与することがなかった。しかし、帝政が形成された前2世紀にはいるとローマの食糧供給が漸次変化していく。とくに、前

123年に穀物供給法が制定されてからは、国家が都市ローマ市民の穀物調達を保障するようになる。これは何を意味するのか。宮崎は、共和政の諸側面でもある権力側—非権力側の関係、政治のあり方、制度、公と私との関係が前2世紀以降、変化しつつある状況を反映しているのではないかとみる。

とくに、統治にたずさわる者（権力側）の被穀物供給者（非権力側）に対する「配慮」が強まる。それがローマ市民（成人男子）に穀物を廉価で供給する「食糧供給のための『配慮』」（クーラ・アノーナエ）だ。そして、このような統治者には、共和政の制度を逸脱した強大な権限が賦与された。すなわち、都市ローマでの食糧供給・分配のための制度が確立し、そのための帝国全域に及ぶ統制があったといえよう。ちなみに、前123年の穀物供給に関するセンプロニウス法では、ローマ市民に対して穀物の定期配給が国家によって行われた。

その際、生産地における生産—調達—輸出一ローマ市場での価格・販売等にいたるまで、食糧供給長官により強度の統制がしかれていた。また、港湾、備蓄の整備が進められた。ただ、帝政期の食糧供給の特徴は、あくまでも有力者（とくに皇帝）による私的な施与であり、皇帝による全体的な食糧供給政策は存在していない。すなわち、共和政期においては、基本的に穀物供給は各住民の自力での調達ないし施与という形で行われていた。アウグストゥス期には、戦争、不作、天災、投機目的の価格操作により計7回の食糧危機が知られている（41年の治世を平均すれば6年に1度なんらかの食糧危機が起きた）。

■「すべての道はローマに通ず」—穀物供給をめぐる状況

ところで、約100万とされる古代ローマの人口を支えるのに必要な年間の穀物の量はどのくらいか。当時の1人あたり年間消費量の推計値から算出すると、3,000万~4,000万モディウスとみられる（1万トン=150万モディウス、20~27万トン）。

この巨大な人口を支えるための穀物の大部分はアフリカ、エジプト、シチリア、サルデーニャといった属州から、税や地代、輸出品として調達さ

れた。「すべての道はローマへ通ず」ということわざは、目的までの手段や方法は何通りもあるという意だ。しかし、本来は文字通り、ローマから放射線状にのびた全長15万キロのローマ街道をさすものだ。塩野七生は『ローマ人の物語〈14〉パクス・ローマナ』で、「1つの目的のために完璧につくられたことは、他の目的のためにも役立つという真理を、ローマ街道くらい如実に示してくれるものはない」と書いている。ここで「他の目的のため」とは、食糧の輸送のことであろう。

実際、歴代の多くの統治者や皇帝が、ローマ街道をはじめ穀物を大量に安定して供給するため輸送、備蓄への介入を行っている。例えば、クラウディウスによるオスティア港の拡張、ネロ帝の運河拡張計画、トラヤヌス帝のオスティア港の再拡張などだ。アウグストゥスは、あくまでも私的にはあるが、飢饉に備えて恒常的に穀物を備蓄していた。このアウグストゥス期に、穀物の生産―調達―輸送―備蓄が皇帝によって一定程度保障されるシステムが形成されつつあった。穀物供給において実際的な業務を果たしたのは商人と船主であった。このため、皇帝は、商人・船主に対して、海上輸送の損失補填、船舶建造への諸特権付与など、さまざまな保護と奨励をした。

しかし、ローマにおける穀物供給はきわめて困難になっていく。それは、①都市ローマへの急速な人口集中、②対外戦争の規模拡大に伴い、軍への食糧供給が拡大した、③イタリア半島の農地荒廃および大土地所有制の民間のなかで、主食の小麦からオリーブやぶどうなど果樹栽培へとシフトしたことによる。加えて、海賊により海上輸送が困難となり、海外産穀物を扱う商人たちによる価格操作なども加わると、穀物不足が生じ価格が高騰するようになるというパターンだ。こうしたなか前57年、ローマにおいて穀物不足と穀物価格急騰に起因して食糧危機が発生した。この措置としてポンペイウスに「食糧供給のための『配慮』」が付与された。これは、ローマ共和政末期における「異例の命令権」である。

古代ローマの食糧問題

年代	主要な政治的事項	食糧関連事項	その他
前753	ロムルス王によるローマ建国(伝説)		
509	王政廃止、共和政へ	ローマ市民の食糧は自力調達	
451	初めての成文法「十二表法」制定		
218	第2次ポエニ戦争	領土拡大に伴い大量の穀物が入	
215~133	ローマ軍：ヒスパニア、マケドニア戦争	穀物価格高騰 センプロニウス法 食糧供給長官による 供給体制の整備(生産、調 運、価格、販売)	ローマ市民に対する 穀物の定期配給 港湾、備蓄整備
133~123	グラッス兄弟の改革	飢饉	農地分配法
73~	スパルタクスの反乱	海賊による穀物供給途絶える	穀物復活の試み
67	ポンペイウスに「異例の命令権」賦与	ポンペイウス海賊退治	穀物供給に関する
58	カエサル、ガリアへ	穀物不足により住民反乱、 無料配給へ	元老院決議
27 西暦紀元	オクタウィアヌス、アウグストゥスの称号を受ける	飢饉(41年の統治期間で7 回の飢饉) 穀物受給者の制限 有力者による私的な食糧供給が主	穀物供給長官設置
117	トラヤヌス帝の治世下、版図最大に		
238	3世紀の危機	政治危機、軍事危機、財政危機	
476	ゲルマン人傭兵隊長オドアケルがロムルス帝を廃す。西ローマ帝国滅亡		

資料) 宮崎麻子「ローマ帝国の食糧供給と政治」を参考に筆者作成

■おわりに

ローマ帝国はなぜ滅んだのだろうか。ゲルマン民族の侵入、政治的混乱や経済活動の衰退、食糧危機など、さまざまな説がある。しかし、はっきりしていることは、トロイア(トロヤ)陥落やカルタゴの滅亡とはまったく異なることだ。いわば長い年月をかけて地中海にまたがる版図を拡大していくなかで、さまざまな内因・外因が重なり、次第に多機能不全に陥ったことのようにだ。

本稿でみたように、ローマ帝国の盛衰には食糧問題が重要なかわりをもっていた。同時にそれは現在の世界が抱えた食糧問題によく似ている。懸念されるのは、今世紀にはいつから世界の食糧マーケットが一段とグローバル化していることだ。とくに、農業開発ブームに伴い食糧供給のフロンティアが拡大し、確かに生産量は飛躍的に増大したものの、一方で地球温暖化、異常気象、水不足問題、生物の多様性喪失など、「自然の反逆」ともいえる現象が起こっている。これは、世界的な農業開発ブームで、のびきった生産のフロンティアが自然の領域に大きく踏み込んできたことにより、食糧市場は大きなリスクにさらされるようになったことを意味するものである。

【参考文献】

- 宮崎麻子『ローマ帝国の食糧供給と政治』(九州大学出版会、2011年)
 パトリック=ファース『古代ローマの食卓』(東洋書林、2007年)
 塩野七生『ローマ人の物語(14)パクス・ローマナ(上)』(新潮社、2004年)
 青柳正規『ローマ帝国』(岩波書店、2004年)
 南川高志『新・ローマ帝国衰亡史』(岩波書店、2013年)
 桜井万里子、本村凌二『ギリシアとローマ』(中央公論社、2010年)